

コーチングスキルの実践練習がたっぷりの2日間。リハビリ・糖尿病診療・がん診療・クリニックのマネジメント、それぞれの現場でコーチング活用している講師陣による講演です。

講演

医療におけるコーチングの有用性・効果について

出江 紳一

国際コーチ連盟プロフェッショナル認定コーチ
鶴巻温泉病院 副院長 リハビリテーション専門医

患者さんとの対話やカンファレンス、申し送り、組織のリーダーシップ、人材育成など、医療では様々なコミュニケーションが交わされます。患者中心医療には対話が必須です。また緊急時に的確な指示命令が必要な場合もありますが、普段から自由な会話が交わされ互いを尊重する文化が医療の質の向上には必要であると考えます。相手の目標達成のための自発的な行動を促進する対話型コミュニケーションであるコーチングが医療においてどのように活用されているかを紹介し、それぞれの現場に取り入れる方策と一緒に考えたいと思います。



コーチングの適用 ～コーチャブル・アンコーチャブル～

荒木 登茂子

臨床心理士
九州大学大学院医療経営・管理学講座 元教授

医療現場でのコーチングは、相手の存在に寄り添い、being(あり方)も、doing(行動)も大切にして行動変容に導く。しかしコーチングがうまく機能しないアンコーチャブルな状況もある。からだの症状、パーソナリティ、コーチとの関係性などの視点を含めて、アンコーチャブルからコーチャブルへの可能性を検討する。



糖尿病患者さんのコーチになる

森岡 浩平

国際コーチ連盟アソシエイト認定コーチ
森岡内科クリニック 院長

糖尿病に罹患するという事は、患者さんが糖尿病という「望まない荷物」を一生持ち続けるという事です。医療者に求められるのは、糖尿病患者さんの全身状態を診るとともに、患者さんの日常生活に寄り添い、患者さんの人生を俯瞰する観点です。医療者がコーチとして糖尿病患者に関わることについて考えたいと思います。



クリニックの経営再建に活かすコーチングマネジメント

河井 葉純

生涯学習開発財団認定マスターコーチ
(株)メディカルビジョンクエスト 代表取締役
日本コーチ協会認定メディカルコーチ
一般社団法人日本看護コーチ協会 副代表理事

院長交代・常勤職員7名中6名が退職したクリニック。経営を立て直す半年間のマネジメントにコーチングを活用した結果、何が起こったのか。実際の事例を通して、経営再建の過程とコーチングマネジメントの実際についてお伝えします。



がん診療におけるコーチング実践

安藤 潔

国際コーチ連盟プロフェッショナル認定コーチ
東海大学医学部血液腫瘍内科学 客員教授

2006年に「がん対策基本法」が施行され、患者・家族の視点が尊重されるようになったことをきっかけに、がん患者・家族のメンタル支援の重要性が認識されている。コーチングは「傾聴」「承認」「質問」を意識的に活用して有効な対話的コミュニケーションを創り出し、相手の気づきを促し、行動変容をもたらす、目標達成をサポートする。がん医療の中でコーチングは、1)病名告知、2)治療法の決定、3)入院中、4)社会復帰、5)外来通院中のグループコーチング、6)再発、7)終末期、8)がん家族支援、9)がん医療におけるチーム医療などの場面で有効であり、がん患者・家族のメンタル支援のための普及が期待される。



チームビルディングとコーチング

大石 まり子

国際コーチ連盟アソシエイト認定コーチ
医療法人大石内科クリニック 理事長

10数名の多職種集団であるクリニックでは、メンバーの個性と関係性が職場環境を決定します。互いの違いを認め尊重するコーチングマインドと自由でアサーティブなコミュニケーションはメンバー間の関係性を改善し、協働するチームを育てます。当院での経験を通して、チームビルディングに活かすコーチングについて伝えたいと思います。



Coach

近藤 真樹

国際コーチ連盟認定マスターコーチ
株式会社メディカルコミュニケーションサポート 取締役

協賛：(公社)日本リハビリテーション医学会
(株)メディカルコミュニケーションサポート

※ 講演内容は若干変更となる場合があります。